

出題分析		
試験時間 90分	配点 100点	大問数 4題
分量（昨年比較）〔減少 同程度 増加〕		難易度変化（昨年比較）〔易化 同程度 難化〕
<p>【概評】</p> <p>例年通り全問論述式の問題。時代別では、古代史・中世史・近世史・近現代史から各1題出題された。テーマ別では、文化史・政治史から各1題、対外関係史から2題出題され、経済史・社会史からの出題はなかった。内容（大問Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、過程（大問Ⅳ）、効果を含めた影響（大問Ⅰ・Ⅱ）の説明が求められた。いずれの問題も教科書や図説資料集で出てくる事項であり、問題文でも書くべき事項がはっきりと示されているが、関連知識がなければ、問題の意図から逸れることなく200字程度でまとめるのは難しい。したがって、日本史の知識はもちろん、文章の構成力といった日頃の学習量で、出来が分かれるだろう。また、新課程移行に伴い歴史総合も大阪大学入試日本史の実施科目に含まれており、大問Ⅳでは近現代の台湾について問われた。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
(Ⅰ)	墾田永年私財法	墾田永年私財法の中身と影響について、律令体制との関わりとともに問われた。設問文にあるように、墾田永年私財法を契機に律令体制は崩壊するという見方は近年見直され、必ずしも律令体制に対立するものではなかったとの見方へと大きく転換している。教科書においても旧課程と新課程では表現が変化しているのが見て取れる。こうした見方の変化も念頭に、具体的に述べておくことが求められた。	標準
(Ⅱ)	鎌倉時代の仏教のあり方を問い直す動き	12世紀後半に相次いだ戦乱や飢饉により、仏教界におこった動きについて、鎌倉時代の僧を3人あげて説明することが求められた。新仏教の人物を想起し、そのなかから共通する特色をあげやすい3人を選んで述べていくとよい。解答例では法然・日蓮・道元を選び、一つの道を選び修行するという点を共通する特色としてまとめた。	標準

設問別講評			
(Ⅲ)	琉球王国の対外関係	琉球王国と、江戸幕府・中国大陸の王朝との関係について薩摩藩の動向とともに問われた。薩摩藩に征服されその支配下でありながら、名目上は明・清を宗主国とする日明（日清）両属関係にあった琉球王国については、頻出テーマであるため比較的書きやすかったかもしれない。	標準
(Ⅳ)	近現代の台湾	「日本との関係を中心に」とはあるものの、「台湾が経験した政治的状況」について、その過程を述べなければならない。1895年に下関条約で台湾が日本に割譲されてから、1949年に中華人民共和国が成立して中華民国が台湾に逃れて存続するまでを時系列で述べるが、日本の統治下で「台湾」の政治的状況がどのような過程をたどったかを教科書の知識でつなげていくのはやや難しかったといえる。	やや難

合格のための学習法

大阪大学入試日本史では、歴史的事象の内容や要因・対応策・変化・影響・展開などについての具体的な記述が求められるため、設問の意図に沿って的確に述べることが大切である。そのためには、日頃より教科書を精読する際にも、歴史の縦・横の繋がりを意識しながら読むことが肝要で、テーマごとにわかりやすくまとめている図説資料集にも目を通しておくとよい。また、テーマ別にバランスよく出題されることも特徴であり、テーマ史ごとに教科書を読み込むのも有効である。最後に、過去問演習も可能な限り過年度分を遡り、大阪大学入試日本史で求められる論述について傾向を把握し、その要求に応えた解答ができるようにしておこう。歴史総合が実施科目に含まれていることから、世界との関係に着目することも必要になる。